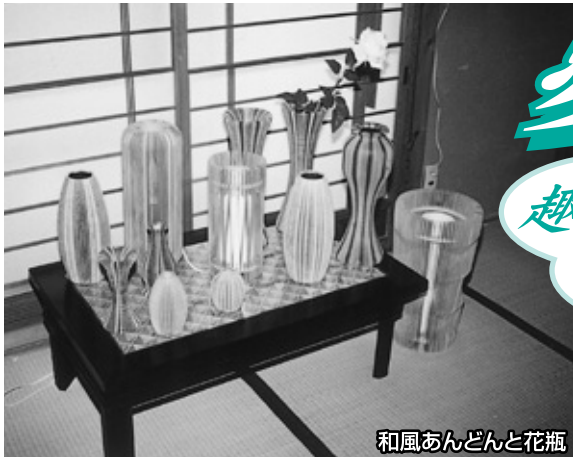


# 夢追の人

趣向を凝らす  
才覚が光る



仁田原建具製作所  
仁田原 進さん



和風あんどんと花瓶

仁田原さんは創意工夫が大好きだ。その際の発想が事業を支えてきた。木工まつりと同時開催になった今年の華胥の夢博には、仁田原さんの作品が並んだ。

作品が全国展で毎年のように入賞

するようになったのは、昭和59年度以降だ。この年に何があったのだろうか。

仁田原さんは、建具の腰板に実に画期的なデザインを発表した。それを見た全国の業者が一様に驚き入ったという。保守的な業界にあって、それはとても珍しかった。

その腰板のデザインは神奈川県の小田原細工にヒントを得て、ひねり出したものだ。今ではこのデザインが全国の本流になっているそうだ。全国展に出

される作品のほとんどは、同様の文様を持っている。もっとも仁田原さんもじつとしていたわけではなかった。そのデザインに改良を加え続けたそうだ。

趣向を凝らす才覚は子供時からだろう。仁田原さんは、「小さい頃から物を作るのが好きでした。自分が作ったコマがよく回ったので、友達の間も作ってあげてましたよ。」と笑う。

今もアイデア探しに余念がない：「と言うよりも考えるのが好きだ。発想は主にどこから来るのだろうか。面白いことにそれはテレビ。」

テレビで放映される舞台装置を注意深く観察しますね。」「パレエとかミュージカルでなく、「時代劇」だそう。 インタビューの際の奥さんのつこみでわかった。仁田原さんはいい作品をたくさん見ること、四六時中考え続けることもあげている。うなづける…。

ここ2年ほど特に力を入れているのが、和風あんどんと花瓶。

今回の華胥の夢博にはこの2つを出品した。どちらも、屋久杉、檜、朴の木のいずれかを用いている。製作には若い頃から培った組子の技術がモノいつている。ただ仁田原さんらしく組子にない柔らかな曲線や新しい発想が随所に織り込まれている。床の間に置いたら、びったりの風情だ。

なぜこうした製品を作ろうと思いつたのだろうか。

『これらの製品はすべて残材でできています。建具を造る際には必ず「切り出し」と呼んでいる残材が出ます。それを何とか再利用できないかと、ずっと考えていました。かれこれ15年ほど前からです。ここ2年ほどやっと実を結んだ形です。』

全国展、北九州物産展などでも好評だそう。

価格は3,500円から15万円ぐらいで、幅がある。

これからの夢を聞いてみた。

「とりあえず、あんどんと花瓶を軌道に乗せたいですね。それができたら、また新しい製品を作ってみたいと思いますよ。本業の建具は息子に任せて、私は独自の製品作りに励みたいですね。」

